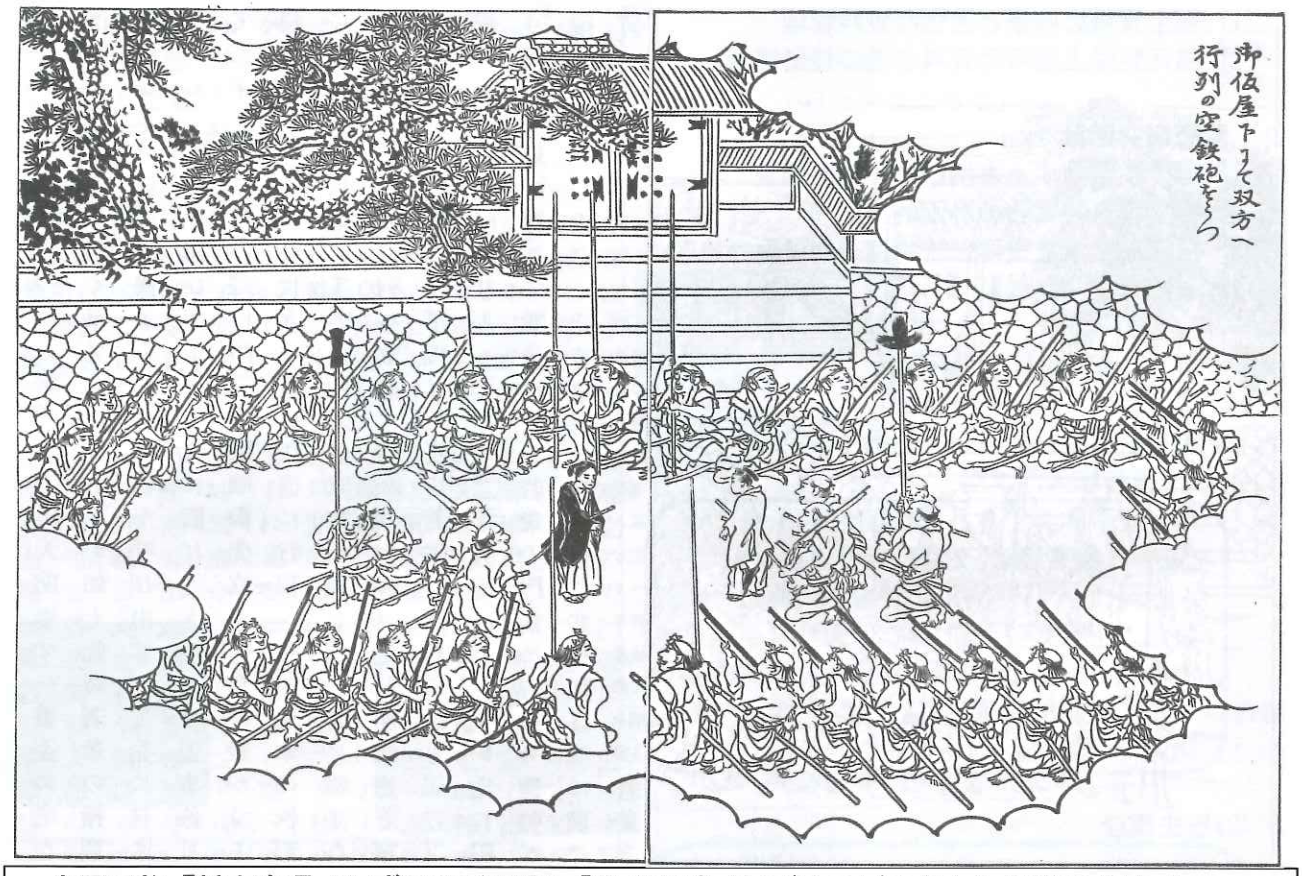
出水市歴史民俗資料館

歴民館だより

vol. 12　No. 1

令和２年５月号



白尾国柱『倭文麻環（しずのおだまき）「出水児請（いずみちごもうし）解散の場面」』

寛永１４年（1637）、天草の乱が起こると出水地頭山田昌巌は出水の兵とともに出陣した。この時肥後と出水との境目の警備に貢献したのが、昌巌の子息松之助を大将とした留守部隊であった。

帰陣した昌巌は、この留守部隊の働きを大いに賞賛し、以後この時の様子を若者たちの鍛練に用いるよう命じた。これを「児請（ちごもうし）」といい、出陣から帰陣までの動きを表現している。

児請は幕末まで 200 年以上続き、「出水兵児」育成に大いに貢献したのであった。

ご挨拶

昨年度は、多くの方々に出水市歴史民俗資料館をご利用いただきましてありがとうございました。古文書解読入門講座、子ども講座（夏休み歴民館クイズ、体験活動「勾玉を作ろう」）、歴史講座、特別展「出水郷士『軍役高帳』の世界」等に多くの方々のご参加、ご観覧を賜りまして誠にありがとうございました。

また、諸団体や各学校の要請に応じて、出前講座、団体見学を通した郷土学習の実施等、啓発活動、諸教育活動にも協力させていただくことができ、感謝を申し上げます。

一方残念ながら、年度末以降新型コロナウィルス感染防止のため、臨時休館措置、あるいは出前講座あるいは団体見学の中止というこれまでにない事態が発生し、十分なご利用を提供できない場面もありました。

令和２年度は、感染症の一日も早い終息を願うとともに、出水の歴史・文化を学ぶ拠点として、昨年以上に展示や講座等の充実を目指し、『親しめる、学べる場』になるように努めて参りますので、一層のご利用、ご活用をお願い申し上げます。

出水歴史民俗資料館	高尾野郷土館 古城画伯コレクション館	野田史料館
出水市本町３番 14 号 中央図書館２階 ☎ 0996-63-0256（直通）	出水市高尾野町大久保 158 番地５ ☎ 0996-82-5452（図書館）	出水市野田町上名 6094 番地１ 野田図書館内 ☎ 0996-84-3100（図書館）

Ⅰ　令和２年度事業計画

１　資料収集・保存

(1) 郷土資料の収集と適切な資料管理

(2) 高尾野郷土館所蔵資料台帳の整備継続

２　調査研究活動

(1) 展示に関連する事柄についての調査

(2) 古文書解読業務の計画的推進

(3) 出水市出水麓重要伝統的建造物群保存地区の研究

３　教育普及活動

(1) 古文書解読入門講座

期日：令和２年６月６日、１３日、
２０日、２７日、
７月４日　【土曜日】
時間：午後２時～同３時 30 分
内容：出水関係古文書を中心とする古文書の初歩的解読
講師：館職員

(2) 歴史講座

①第１回
期日：令和２年１０月１０日（土）
内容：出水の歴史に関して（その１）
講師：館職員

②第２回
期日：令和３年２月２０日（土）
内容：出水の歴史に関して（その２）
講師：館職員

(3) 広報活動

①「歴民館だより」51, 52, 53, 54 号発行

②ホームページ、インスタグラム等の充実

(4) 子ども講座

①夏休み歴民館クイズ
期間：夏休み期間（７月２１日～５週間）
内容：展示に関するクイズ（５問×５週）

②体験活動「勾玉をつくろう」
期日：令和２年７月２６日（日）
内容：小学生を対象とした創作活動。

(5) 学校教育との連携による学習活動の推進

・ 史跡に行って、現地で学ぶ歴史学習

(6) 「歴史のまち　出水」啓発活動と関連機関・団体との連携

・ 史跡の案内、出前講座

４　展示・企画活動

(1) 常設展示

①一般展示の工夫改善
・適切な資料の展示替え
・説明板の工夫・改善

②常設展示
展示の見直し作業

(2) 特別展

「写真で見る出水の文化財」（仮称）
期日：令和２年１０月４日（日）
～１２月２７日（日）

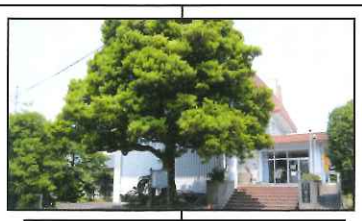
※高尾野郷土館・古城画伯コレクション館
ミニ企画展
「昔ばなしのどうぐ展」
期日：令和２年７月１８日（土）
～８月３１日（月）

５　出水歴史研究会（出水史談会）

期日：第１３回定例研究会　未定
内容：会員による研究発表

出水市歴史民俗資料館　TRC（株）図書館流通センター出水営業所

【出水歴史民俗資料館】
休館日：毎月第３月曜日
（祝日は翌平日）
12／29～１／４



【高尾野郷土館・古城画伯コレクション館】
休館日：毎月第３金曜日
（祝日は翌平日）
12／29～１／４

【野田史料館】
休館日：毎月第３金曜日
（祝日は翌平日）
12／29～１／４

Ⅱ　前年度実施した事業

☆　資料収集・保存

〇ガス燻蒸（害虫等の駆除）

・出水歴民館　９月２日（月）～４日（水）

〇寄贈等諸資料の確認・受け入れ作業支援

〇寄託資料の一部解除作業支援

☆　教育普及活動

(1) 古文書解読入門講座

期間：６月～７月（全５回）

人数：延べ７０人

(2) 歴史講座Ⅰ

期日：１０月１２日（土）

演題：「出水郷士の実相に迫る『軍役高帳』の世界」

講師：当館職員　肱岡　隆夫

受講人数：２６人

(3) 歴史講座Ⅱ

期日：２月８日（土）

演題：「薩摩の踊りと出水」

講師：当館職員　宮内　弥生

受講人数：２６人

(4) 出前講座

・野田中学校１年生

・県神社庁日置・さつま・出水支部総会

・今釜西自治会長寿会

・出水市民大学

・出水高校１年生

・出水人生大学

・市老人福祉大会　他

(5) 広報活動

・「歴民館だより」47, 48, 49, 50 号発行

・ホームページ随時更新

・県外諸事業所向けパンフレット制作・配付

(6) 子ども講座

①　夏休み歴民館クイズ

対象：小学生

内容：５週間に渡って展示に関する問題にチャレンジ。

全問正解者にプレゼント提供。

参加人数：３８人（延べ人数１７２人）

②体験活動

「勾玉をつくろう」

期日：７月２８日（日）

参加人数：

子ども２１人

保護者１１人

☆　調査・研究活動

(1) 竹添家史料「維新前期代、戊辰之役」解読

(2)「新編　求麻外史」編纂・出版

(3) 伝承されている県内の郷土芸能

☆　展示・企画活動

〇特別展「出水郷士『軍役高帳』の世界」

期間：９月２３日（月）～１２月２８日（土）

観覧人数：１１７５人

〇高尾野郷土館ミニ企画展

「古城江観収蔵スケッチ展《アメリカ編》」

期間：１１月１日(金)～１月３１日(金)

観覧人数：２５９人

☆　利用状況

(1) 出水歴史民俗資料館

４，８３１人（前年度比　97.0%）

(2) 高尾野郷土館・古城画伯コレクション館

８９５人（　〃　　81.7%）

(3) 野田史料館

４０５人（　〃　　47.5%）

(4) 団体見学　２７団体　９２４人

※30 年度までのグラフに出前講座は含まれない。

☆　歴史のまち　出水案内業（平和学習を含む）

神戸市（株）モリエン、野田中学校２年生

☆　出水歴史研究会「出水史談会」定例研究会

・第 12 回　７月１４日（日）参加者　３３人

「出水の忍者のこと」

発表：　会員　小原　大策氏

論考　「『大正６年　児請再現写真』は本当に児請だろうか」

出水歴史民俗資料館
副総括責任者　肱岡　隆夫

１　はじめに

この写真は、大正６年「山田昌巌翁 250 年祭」の中で再現された「出水児請」を撮影し、一般に頒布された集合写真である。

「児請（ちごもうし）」とは、江戸時代を通じて行われた、出水郷若者の鍛練行事の一つであった。

最前列に立つ羽織袴姿の２人の少年を、若き藩主と見成し、これを大将として出陣する様を体現させることにより、軍団としての能力を高め、同時に藩主への忠誠心を育成することを意図した、江戸時代の出水郷特有の鍛練行事である。

江戸時代天保年間に記されたとされる、白尾国柱著『倭文麻環（しずのおだまき）』に登場する「出水児請」を描いた挿絵の一つを、「便り」の１ページに掲載した。これを見ると、写真版「児請」には、『倭文麻環』では描かれていない多くの鎧装束姿の大人たちが加わっていることに気づく。『倭文麻環』で描かれる「児請」にはこのような鎧装束の者は登場しないのである。

では、写真版「出水児請」には、なぜ本来存在するはずのない鎧姿の人々が参加していたのだろうか。「児請」以外の要素が含まれていた可能性を探ってみたい。

２　『倭文麻環』の記述による「児請」の構成

「児請」は、出水仮屋前に２組の隊列が整列し、近辺の丘陵地まで出陣し、そこで鉄砲訓練を行った後、再び出水仮屋前まで帰陣して解散というのがおおよその流れである。

その隊列の先頭に立つのが大将の役を担う「執持児（とりもちちご）と呼ばれる２人の若衆である。行列では、この執持児の前に数人の老人（40 歳から 60 歳迄）が前駆となる。執持児の後に、数十人の兵児二才（へこにせ、30 歳以下）たちが整然と隊列を組んで続く。

その後に老人数人が袴姿で殿（しんがり）を務める。

兵児二才も先駆の老人も、皆、着物の裾をたくし上げ、陣羽織姿である。４尺近くもある大太刀を佩（は）き、手には多くの者が鉄砲を携えていた。目的地で、鉄砲競いをするためである。

写真版「児請」を見ると、着物、鉢巻き姿で、手に鉄砲を携えた若者たちが後半に控えていることが分かる。では、前半に構える武者軍団は、何者であろうか。

３　山田昌巌と「勢揃」

『鹿児島県史料　斉彬公史料第１巻』「島津安藝国境出水郡ニ迎フ並勢揃」に以下の記述（要旨）がある。

今和泉家当主忠剛が、嘉永４年（1851）第 11 代藩主斉彬が知政後、初めてお国入りの際、玄関口である出水まで一行を出迎えた。斉彬は、中１日滞在したが、その時、出水郷士は「勢揃」を御覧に供じた。

「勢揃」とは、「地頭役所にある時報鐘を鳴すこと数回、此の鐘声を聞くや、一郷内の士民直ちに地頭役所の内外に馳せ聚（あつま）る、士は鎧具或いは陣羽織其他出軍の服装をなし、鉄砲・弓矢・刀槍の類各自得の器械を携え」集合するものである。

まさに非常呼集である。斉彬が出水に到着した５月５日の記事の中には、「勢揃」は「山田昌巌地頭職の時より創（はじ）まれりと云う」とあり、江戸時代初期の出水地頭であった昌巌が「児請」などとともに創設した、出水軍団独特の戦法であったこととして伝えられている。

４　溝口武雄と「日置流腰矢指矢」

写真の鎧武者の中に、烏帽子姿に矢を背負った数人の姿が見える。これは、現在も出水に伝わる古武道の一つである「日置流（へきりゅう）腰矢指矢」を相伝する人々である。

大正６年の「児請」再現の企画者は、この「日置流腰矢」師範の溝口武雄であった。

溝口は、「児請」再現を企画した時、「出水兵児」だけでなく、かつて薩摩最強の軍団とされた出水郷士のすべてを再現しようとしたのではないか。

５　おわりに

写真の先頭に、白い顎髭の老人が２人構えている。相当な高齢者であろうことが想像される。

武士の終焉から 50 年弱。彼らは依然として武士で有り続けていたのだろうと推測される。

「児請」と同時に「勢揃」も再現されると聞いた彼らが、家に伝わる槍や弓矢を携えて出陣しようとした心境は理解できるものがある。

大正６年は「児請」と「勢揃」再現の年であったと考えるならば、写真の疑問も晴れるのである。